

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

【図書紹介】『21世紀の哲学をひらく：現代思想の最前線への招待』（齋藤元紀・増田靖彦編 ミネルヴァ書房 二〇一六年）

Furuya, Toshihiko / 古屋, 俊彦

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政哲学 / 法政哲学

(巻 / Volume)

14

(開始ページ / Start Page)

71

(終了ページ / End Page)

71

(発行年 / Year)

2018-03-20

【図書紹介】

『21世紀の哲学をひらく——現代思想の最前線への招待』

(齋藤元紀・増田靖彦編 ミネルヴァ書房 二〇一六年)

古屋 俊彦

流行を追うのではなく二十世紀初頭の今からも影響を
持ち続ける二十世紀の思想家による様々な哲学的考察の所
在を探る事、全体的な知を指向していなくてもそれらの考
察に通底する隠れた共通の課題を探る事、通常哲学とは言
われていない領域に息づく哲学的考察を探る事、この様に
冒頭で説明されている論集の企画意図は散発的ではあるが
各論文の中に読み取れる。全体は言語圏毎に便宜上三つに
分類されている。ロマンス語圏では、フィリップ・ラクー
ーラバルトとジャン・リュック・ナンシーの政治的なものと
哲学の役割および哲学の終焉に関する両者の思想の分岐
点、フェリックス・ガタリ、ミシェル・アンリの生の現象
学と木村敏、ジャック・ラカン、アントニオ・ネグリとマ
ツシモ・カッチャーリとジョルジョ・アガンベンとロベル
ト・エスポジトなどが紹介されており、個別的に踏み込ん
だ哲学的考察が窺える。ドイツ語圏では、ユルゲン・ハバ
ーマスとニコラス・ルーマンとハンス・ゲオルグ・ガダマ

ーによる実践哲学の論争、ヴァルター・ベンヤミンのアレ
ゴリー思考とハンス・ブルーメンベルクのメタファー学、
テオドール・アドルノとユルゲン・ハバースとアクセル
・ホーネットなどによる承認論の批判的継承が紹介され
ており、哲学的考察の特異性を論争的にそして実際の論争
や批判を通して継承する様子が窺える。英語圏ではスタン
リー・カヴェルによる日常言語と文学、ジョン・ケージに
よる音と音楽、ジュデイス・バトラーによる性の多様性、
コーラ・ダイヤモンドによるヴェイトゲンシュタインの倫理
学、フレーゲとラッセルとストローソン、ドネランとクリ
プキ、カルナップとタルスキ、カプランとパトナム、チャ
ルマーズまでの言語哲学が紹介されており、様々な領域に
特に言語活動の中に掘り起こされた哲学的考察が窺える。

かつてあらゆる学問が哲学と呼ばれていた。次第に対象を
限定して成果を上げる研究(分野)は哲学ではない事になった。
それでも学問の全体構想は哲学の仕事だった。だがそれも挫
折して顧みられなくなった。そもそも哲学には特別な役割な
ど無かった様にも思えてくる。そんな時に改めて哲学の地道
な役割を突き止める仕事は一見むなし。だが意外に出てく
るものなのだ。散発的ではあっても確実な哲学の役割を今こ
そ掘り起こすべきと思わせてくれるのは、この論集に執筆し
ている哲学研究者が諦めていないからなのだろう。